

感染症流行時における予防行動が中学生のコミュニケーションへ与える影響を探究する

後藤 美由紀 ・ 中條 和光* ・ 森田 愛子*

1. はじめに

広島大学附属東雲中学校（以下、本校と略記）では、2015年度より『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」を研究テーマに設定し附属東雲小学校と共同で実践研究を行っている。本校では、テーマの中にあるグローバル時代をきりひらく資質・能力を、「さまざまな文化や価値観を理解し多様性を認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義している。

ここ数年、本校の研究テーマのもとで保健教育（昨年度までは学校保健）領域では、主に保健室で児童生徒の心身の健康に対する支援を行なっている養護教諭の立場から、図1に示すように授業などの学習場面だけでなく、日常生活の様々な場面で他者とかがかわる際に、よりよいコミュニケーションを身につけておくことがそれぞれの場面の基盤になるのではないかと考え、様々なアプローチを探っている。

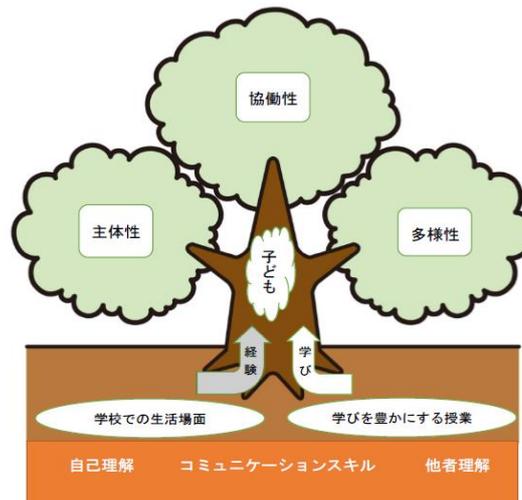


図1 本校の研究テーマと学校保健の関わり

昨年度までは、各教科の授業において学びが豊かになるための生活・学習の基盤としての学級づくりの視点に立って、保健室での個別対応から見えてきた個や集団の課題から、自己理解・他者理解を深め、学習場面や生活場面で必要なよりよいコミュニケーションスキルを身につけるための授業を行ってきた。

しかし今年度は、昨年度の終わりから今年度初めにかけての時期に長期の休校が行われ、生徒らは今までにない状況の中で様々な不安を抱えることとなった。

全国の学校では、学校再開後のマスク着用やソーシャルディスタンスの確保などの感染予防対策という点から、生徒同士が直接対面して集団で活動を行ったり会話したりすることなどを通して人間関係を作り上げていくことが十分にできず、孤立感を強めていることが国立成育医療研究センターの「コロナ×こどもアンケート第4回調査 報告書」(2021)などで報告されている。本校の生徒らもそのような環境の中での学校生活に対して不安を強めていることが、学校再開後、全校生徒を対象に実施した記名式のアンケートと、その内容についての学級担任による個人面談に如実に表れていた。

* 広島大学大学院人間社会科学研究所

Miyuki GOTOU, Kazumitsu CHUJO, Aiko MORITA

Exploring the impact of preventive actions on communication among junior high school students during an infectious disease epidemic

また, 日々体調不良を訴えて来室する生徒のアセスメントを行った際, 背景に人間関係の不安が語られるケースが多く見られた。さらに今年度は, けがや体調不良での来室以外で, 朝の健康観察カードを忘れた生徒に接する時, 少人数で健康診断を実施する時, 各学級を回って感染症予防についてのミニ保健指導を行う時など, 多くの生徒について対人場面での言動を観察する機会が増えた。その中で, 個々の生徒の異なる場面での言動を結びつけて見取ることができ, 予防行動への意識の高低, コミュニケーション傾向などが見えてきた。さらに, その感染予防行動への意識と個のコミュニケーション傾向とに連関があるのではないかと考え始めた。

感染症予防のための行動の1つであるソーシャルディスタンスは対人的な物理的距離だけでなく人と人との関係の距離も含まれると考えられる。また, 物理的距離をとることによるコミュニケーションの困難さがある中で, いかに良好な人間関係を築いていくか中学生という発達段階において大切なテーマである。

そこで, マスクをつけたりソーシャルディスタンスを保ったりといった感染症予防のための行動によって相手の感情などを読みとるための情報が制限され, 自己理解を深めることが阻害されることが対人場面における不安を強める原因となりうるのではないかという点に焦点を当て, 調査研究を進めることにした。

2. 研究の方法について

(1) 研究の目的

本研究では, 現在のように感染症予防のための行動によりコミュニケーションの制限がかかる状況の中で, 生徒がどのようなことに不安や難しさを感じたかをアンケート調査で把握するとともに生徒のコミュニケーションスキルを測定する。それらの関連からコミュニケーションスキルの高低がどのような困難感につながるかを探り, 今後の心のケアや保健指導の参考資料とすることを目的とする。

①調査用紙について

新型コロナウイルス感染症の流行下で生徒と保健室内外で接する中で, マスクをつける, ソーシャルディスタンスを保つなどの予防行動によって「相手の気持ちが分からない」「嫌われているかも」といった不安を感じている生徒が少なくないと感じたことが本研究のきっかけとなった。

そこで, 今までの研究をもとに「コミュニケーションスキルの高さによって, コミュニケーションに関する困難感が異なるのか」について調査をすることにした。

まず, 個のコミュニケーションスキル尺度測定には, 東海林ら(2012)の作成した「中学生用コミュニケーション基礎スキル尺度」の中から, 意思伝達スキル8項目及び他者理解スキル4項目を用いた。東海林らは中学生用のコミュニケーションスキル尺度を作成する中で「児童生徒用には学校生活や友人関係といった『特定の場面や状況』を想定して作成した尺度が非常に多い」と述べており, 「社会的スキルの測定において, 行動・認知・感情の要素に特設焦点を当てることのメリットは大きいと思われる」と考えている。つまり, コミュニケーションスキルを含む社会的スキルを扱う際は, 目に見える行動だけでなく, その行動までの過程における認知や感情を考えることが必要であると考えられる。

そこで, このコミュニケーションスキル尺度とともに, 行動・認知・感情の観点から, 現在の自己の感染症予防行動に対する意識, 友達の感染症予防行動についての感じ方を調査し, それらの関連を検証することにした。

コミュニケーションの困難感については, 次のようなコミュニケーションの要素を盛り込むこととした。言語情報である「言葉」, 非言語情報である「表情・視線・声・しぐさ・姿勢・距離」, さらに「気持ちを伝える」「気持ちがわかる」といった意思伝達・他者理解の要素も加えた。

以上のような実態調査・尺度測定に加え, 休校期間中を含め現在に至るまでに感じた友人との関係における不安や困難感等を記入する自由記述欄を設けた。

②調査の実施について

2020年11月下旬～12月初旬, 中学校1～3年生(各学年2クラス)234名を対象に, 記名式の

質問紙調査(資料1)を実施した。実施方法は、養護教諭である筆者が各教室で10~15分程度、調査及び今後の感染症予防の意識についての講話を行った。

アンケートの各質問内容・回答方法については以下の通りである。

1-①. 現在の自己の感染症予防行動について

学校で指導している感染症を予防するための行動7項目を設定し、自身が気を付けているかを「気をつけていない(1点)」「あまり気をつけていない(2点)」「少し気をつけている(3点)」「気をつけている(4点)」の4件法で回答させた。

1-②. 学校における友達の感染症予防行動に対する感じ方について

自己の感染症予防行動と同じ7項目について、友達の行動に対してどう感じるかを「不安に感じる(1点)」「気にならない(2点)」「安心する(3点)」の3件法で回答させた。

1-③. コミュニケーションスキル尺度

意思伝達スキル8項目及び他者理解スキル4項目計12項目について東海林ら(2012)にしたがい「はい(3点)」「どちらでもない(2点)」「いいえ(1点)」の3件法で回答させた。ただし、「どちらでもない」への回答の集中を避けるため、回答に際しては「なるべく『はい』『いいえ』で答えてください」と文面で示した。

2. 対人場面におけるコミュニケーションに関する個人内比較

コミュニケーションにおける言語・非言語情報、意思伝達・他者理解の要素を含めた13項目について、感染症のリスクが低かった1年前と比べて感じ方が変化したかを「気にならなくなった(1点)」「変わらない(2点)」「気にするようになった(3点)」の3件法で回答させた。

3. 休校期間中以降における対人場面での不安や困難感についての自由記述

「友達と関わる時に感じる、困ったことや気になること」について、対人場面に限定して記述を求めた。

3. 調査結果と考察

(1) 自己・友人の感染予防行動について【設問1-①, 1-②】

まず、調査時に自分がどの程度、感染予防行動に対して気を付けているかという問いに対しての回答を学年別に集計した(表1)。各項目について、学年によって平均差が異なるかを検討する1要因分散分析を行なったが、いずれの項目についても学年間の有意差は見られなかった。平均得点をみると、2年生が他の学年よりやや高い項目が多かった。また、他者と接する際の行動である後半4項目については特に、3年生の得点がやや低い傾向が見られた。

表1 自己の感染予防行動について(学年別平均)

項目	1年生		2年生		3年生	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
マスクを正しくつける	3.82	0.55	3.87	0.44	3.82	0.51
こまめに手を洗う	3.38	0.77	3.58	0.63	3.40	0.65
アルコールで手指を消毒する	3.48	0.75	3.59	0.65	3.43	0.75
友達と距離をとる	2.54	0.73	2.51	0.68	2.38	0.84
友達と大声で笑い合う	2.63	0.86	2.59	0.86	2.55	0.80
友達としゃべらずにお弁当を食べる	3.89	0.51	3.87	0.44	3.71	0.56
声の大きさに気をつける	3.10	0.74	3.12	0.84	2.91	0.75

また、自己の感染予防行動と友人の感染予防行動それぞれに対する意識について、3学年のデータを統合した(表2)。前者は4段階評価、後者は3段階評価であるため、それぞれにおいて、他の項目と比べた評定値の高さを検討した。平均値をみると、「距離をとる」「大声で笑い合う」「声の大きさに気をつける」の3項目(表2では平均値に下線を付した)については、自分が「気をつけている」という意識が他の項目に比べて低い。そして、同様の行動に関し、友人の行動に対する安心感も他の項目に比べて低かった。他者との関係における予防行動である4項目のうち、「友達としゃべらずにお弁当を食べる」以外の3項目が同様の傾向を示したことがわかる。これらの3項目は、「しゃべらずに」に比べて基準が曖昧であるため、正確に守ることが難しい可能性がある。また、個人によって基準が異なっている可能性もあり、友人に対して「近すぎる」「声が大きすぎる」などの不安を感じる場合もあるのではないかと。

表2 自己・他者それぞれの感染予防行動に対する意識

1-① 最近自分が気をつけているか (4段階で回答)

項目	平均
マスクを正しくつける	3.84
こまめに手を洗う	3.45
アルコールで手指を消毒する	3.50
友達と距離をとる	<u>2.48</u>
友達と大声で笑い合う	<u>2.59</u>
友達としゃべらずにお弁当を食べる	3.82
声の大きさに気をつける	<u>3.04</u>

1-② 学校での友達の行動についての感じ方 (3段階で回答)

項目	平均
マスクを正しくつける	2.59
こまめに手を洗う	2.52
アルコールで手指を消毒する	2.55
友達と距離をとる	<u>2.11</u>
友達と大声で笑い合う	<u>2.00</u>
友達としゃべらずにお弁当を食べる	2.61
声の大きさに気をつける	<u>2.23</u>

(2) 個のコミュニケーションスキル尺度について【設問1-③】

質問の①～⑧は意思伝達スキルに関するもので、適切な表出と他者に伝わる表出について測定した。また質問⑨～⑫は他者理解スキルに関するもので、非言語の解読と相手の気持ちの推測について測定した。

学年ごとに、意思伝達スキルと他者理解スキルの平均値を算出した(図2)。1要因分散分析の結果、いずれも差は有意ではなかったが(順に、 $F(2, 231) = 0.569, p = .567, \eta^2 = .005$; $F(2, 231) = 1.221, p = .297, \eta^2 = .010$)、いずれも学年が上がるごとにコミュニケーションスキルの自己評価の値は高くなっている。

意思伝達スキルの平均の学年差			他者理解スキルの平均の学年差		
水準	平均値	SE	水準	平均値	SE
1年	2.253	0.060	1年	2.206	0.071
2年	2.351	0.061	2年	2.285	0.072
3年	2.381	0.061	3年	2.308	0.072

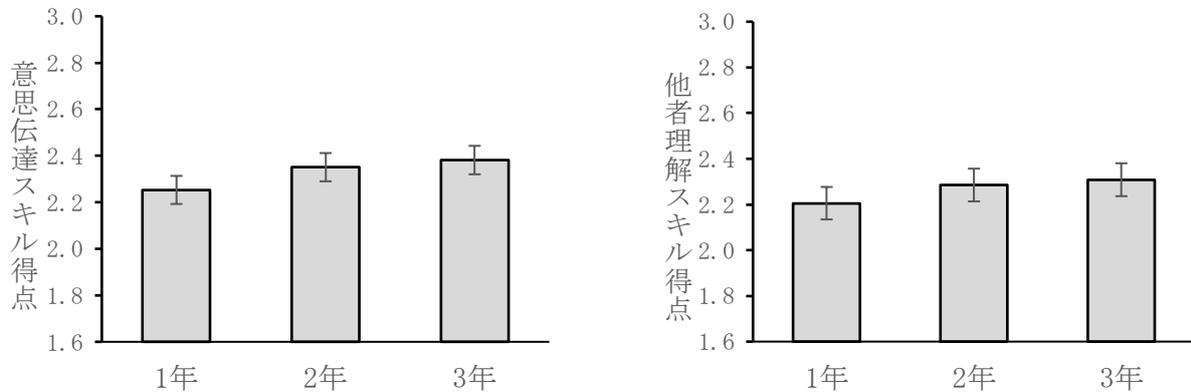


図2 2つのコミュニケーションスキルの学年別平均得点(エラーバーは標準誤差)

また、質問別の学年平均を表3に示す。すべての学年で最も低かったのは④「私は、気持ちをことばで表現するのが得意です」という質問だった(表3では平均値の欄にイタリックで示した)。このことから、どの学年でも言語表出スキルが高くないと自己評価している生徒が多いと考えられる。

表3 質問別の学年平均

	意思伝達 (適切さ)				意思伝達 (他者に伝わる)				他者理解 (非言語)			他者理解 (推測)
	②	④	⑥	⑧	①	③	⑤	⑦	⑨	⑪	⑫	⑩
1年	2.38	<i>1.95</i>	2.23	2.18	2.20	2.11	2.47	2.48	2.39	2.35	2.10	1.97
2年	2.36	<i>2.09</i>	2.35	2.35	2.21	2.37	2.51	2.49	2.44	2.47	2.12	2.12
3年	2.43	<i>1.96</i>	2.47	2.34	2.31	2.31	2.60	2.64	2.44	2.49	2.16	2.14

(3) 対人場面におけるコミュニケーションに関する個人内比較について【設問2】

自他のコミュニケーション行動についての意識が新型コロナウイルス感染症の流行していない1年前と比べてどう変わったのか、言語行動・非言語行動の両方の項目について答えさせた。

その中で、自他の非言語行動(表情, 視線, 声, しぐさ)に絞って学年ごとに比較したものが図3である。

	自分の 非言語行動	友達の 非言語行動	SE	SE
1年生	2.241	2.421	0.042	0.049
2年生	2.204	2.313	0.043	0.050
3年生	2.117	2.211	0.043	0.050

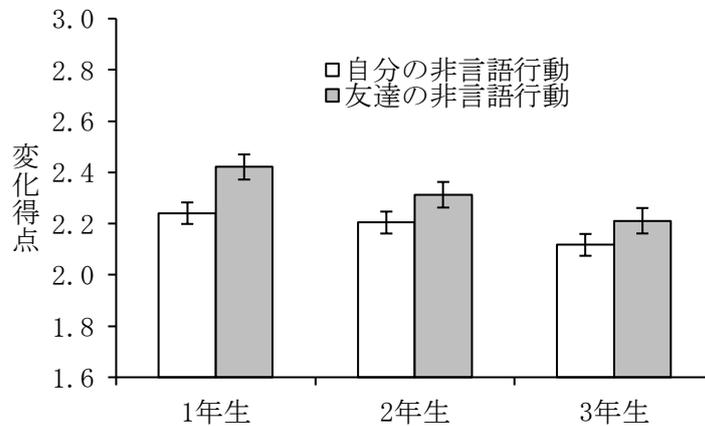


図3 対人場面における非言語コミュニケーションに関する個人内比較

1年生のほうが3年生より「気にするようになった」と答えており、どの学年でも、自分より友達の非言語行動を「気にするようになった」ことがわかった。

(4) 対人場面での不安・困難感について【設問3】

記入があったのは1年生が56名(70.9%), 2年生が32名(41.0%), 3年生が22名(28.6%)で1年生が最も多かった。

記述内容については、自己に関する記述・他者に関する記述・その他に大きく分類し、さらに設問1-③と関連付けて、それぞれを表4のように細分化した。記述量が多いものや内容によって複数の項目に該当するものについては、重複してカウントした。表4では全校の回答人数に加えて、特に不安が高いと見られる記述の多かった1年生の回答人数を示した。

表4 自由記述の分類とそれぞれの項目について記述した人数(全校・1年生)

	自己に関する記述						
	他者理解の 困難さ	意思伝達の 困難さ	他者の評価	自己の対人行動 の不安・認識	孤立感・他者 との距離	交流減少	予防行動へ の不満
全校	22	5	5	28	10	5	7
1年	12	0	5	17	4	3	2

	他者に関する記述		その他の記述	
	他者の対人行動 への不安	他者の予防行動 への不安	その他の 不安	その他
全校	11	29	10	6
1年	4	14	3	6

各項目の具体的な記述内容を以下に挙げる。

○他者理解の困難さ

- ・マスクをしているので、相手の表情がわからず笑っているのか怒っているのか悩んでいるのかわからない

- ・マスクをしていることで相手が今どんな気持ちなのかということが分かりにくく, 自分の思っていることと相手の思っていること(表情)が違う

○意思伝達の困難さ

- ・話している時, 伝えたい内容をイメージできているのに, 言葉が出にくくて友達も「ん?」と言う
- ・自分の気持ちをどれぐらい言ってよいのかあまりわからない

○他者の評価

- ・時々, 自分ってどう思われているのかなって感じる場合があります
- ・常にみんなに嫌われていると思いながら行動してしまうこと

○自己の対人行動の不安・認識

- ・マスクで友達の様子がわからないので, いやな思いをさせていないかが不安
- ・クラスが変わったこともあり, 前よりも人とか交わすのが少し苦手になった
- ・密接するのはダメだが関係がこわれないか気にしている

○孤立感・他者との距離

- ・休校中, LINE をする人達は情報が入ってきやすいけど自分はしないので引きこもりの人のような思考を持つようになった
- ・なかなか輪の中に入れなくなる, 去年よりスーッと入ることができなくなった

○交流減少

- ・中学校に入っても(違う小学校からきた)新しい友達と話そうとする人が少なかった
- ・クラスが変わったので, 話す人がけっこう限られた

○予防行動への不満

- ・話す声や距離で注意されるが, マスクで表情もわからず, 声やしぐさで伝えるしか方法がないし, 喜びや悲しみや怒りは, 距離と話す声がなければ伝えられないのではないのですか
- ・部活(バスケ)の時, 大きな声で応援することができなくなって困る, バスケはチームですスポーツなのでチームメイトのために勝とうという気持ちが消えたらまずいと思う

○他者の対人行動への不安

- ・きつい言葉が多くて困るし, (入学当初より)陰口が増えてきた
- ・自分と友達との距離をとられた時「一緒にいたくない」のかと感じる

○他者の予防行動への不安

- ・後輩に掃除後の手洗いをしてと言ってもしてくれない
- ・マスクをつけずに教室に入る人や休憩時間にマスクをはずして大声を出す人がいて心配になる
- ・自分がない時に友達が自分の席に勝手に座っていて心配だし, 学校のものを触る前に友達が手を洗っているか気になる

「マスクをしていない人がいる」「大声でしゃべる人がいる」「友達がくっついてくる」といった他者の予防行動に対する不安に関する記述が最も多く, 続いて「自分は声が小さいので」「思ったことをすぐ言うってしまうので」といった自己の対人行動の不安・認識に関する記述が多かった。

また, 他者理解の困難さについて記述している生徒も多く, 自分の気持ちが伝わらないことより相手の気持ちがわかりにくいことについて困難感を示す傾向が見られた。

自他の行動に関する各項目について記述した学年別の人数を図4に示す。

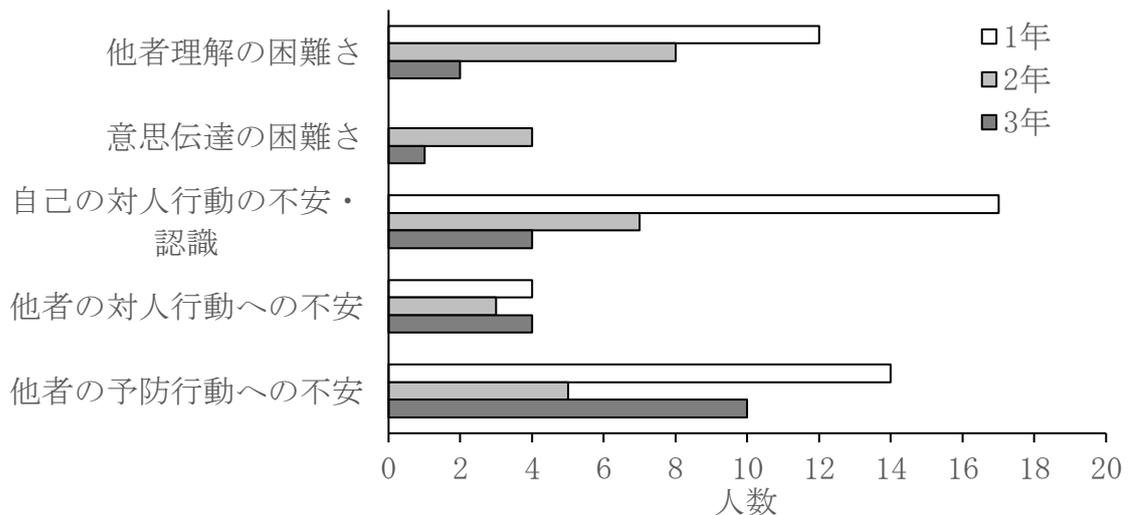


図4 自他に関する項目における学年別の人数

他者理解の困難さや自己の対人行動の不安・認識について1年生が最も多いことについては、2・3年生と比べて入学してからのコミュニケーション量が少ないということが背景にあるのではないだろうか。記述の中に『表情』が含まれる15人中、半数以上の8人が1年生であることから、表情による他者理解がマスクをするという感染予防行動によって阻害されていることで自己の対人行動が他者にどのようにとらえられているのかわからない、という不安につながっていると考えられる。

学年が上がるごとに減少する項目が多いが、他者の予防行動への不安については3年生でも多く記述されている点については、調査の時期が高校受験を控えている時期であったことが影響しているのではないだろうか。

(5) 各データの関連について

○コミュニケーションスキルと感染予防行動, コミュニケーションの個人内変化

まず、コミュニケーションスキルと感染予防行動との関係については、意思伝達スキルと他者理解スキルそれぞれの相関関係は表6のようになった。スキルが高い生徒の方が感染予防行動に「気をつけている」傾向が見られる。

表6 コミュニケーションスキルと自分の感染予防行動の相関係数

感染予防行動	意思伝達スキル	他者理解スキル
マスクを正しくつける	.204 **	.012
こまめに手を洗う	.206 **	.131 *
アルコールで手指を消毒する	.248 **	.138 *
友達と距離をとる	.134 *	.139 *
友達と大声で笑い合う	.154 *	.059
友達としゃべらずにお弁当を食べる	.035	.146 *
声の大きさに気をつける	.079	.064

次に、コミュニケーションスキルと自他のコミュニケーション行動(特に非言語行動)についての意識変化との相関関係を表7に示す。「他者理解スキルが高い生徒はスキルが低い生徒よりも友達の非言語行動を気にするようになるのではないか」と考えたが、ここでは有意な相関は見られなかった。

表7 コミュニケーションスキルと自他の非言語行動への意識変化との相関係数

	意思伝達スキル	他者理解スキル
自分の非言語行動を 「気にするようになった」得点	-.016	.038
友達の非言語行動を 「気にするようになった」得点	.044	.047

○対人場面での不安・困難感とコミュニケーションスキル

続いて、対人場面での不安・困難感についての記述とコミュニケーションスキルとの関係を見つめる。他者理解の困難感について記述している生徒22名とその他の生徒についてそれぞれ、コミュニケーションスキルの平均値を比較した(表8)。他者理解の困難感を感じている生徒は、それ以外の生徒と比べて意思伝達スキルのポイントがすべての項目において低く、他者理解スキルのポイントはすべての項目において高かった。

このことから、他者理解への意識は高いが、そこでの思いを表出するスキルが低くコミュニケーションによって他者理解が深められないため不安・困難感を感じている可能性が考えられる。

表8 他者理解の困難感についての記述とコミュニケーションスキル(平均値)について

	意思伝達スキル								他者理解スキル			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
記述あり	1.95	2.23	2.05	1.82	2.32	2.14	2.41	2.00	2.73	2.32	2.45	2.18
記述なし	2.27	2.41	2.29	2.02	2.55	2.37	2.55	2.32	2.39	2.05	2.44	2.12

コミュニケーションスキル尺度の質問の中で「表情」「言葉」の2つに着目したい。これらのキーワードが含まれる質問は、「非言語コミュニケーション」と「言語コミュニケーション」と関連する質問と考えることができ、生徒の意思伝達・他者理解に影響を与えているのではないかと考えた。

まず「表情」というキーワードが含まれる⑧思っていることを表情で表現するのが得意、⑩表情から相手の気持ちを想像することが得意、の2つのスキルについて自己評価が低い(評価が⑧⑩で「1-1」「1-2」「2-1」)生徒を抽出し、学年ごとの人数を集計した(表9)。

いずれのスキルについても自己評価が低い人数は1年生が最も多く11名だった。これは、入学当初からマスクを着用している同級生・上級生・教員に対し、コミュニケーションの経験が少ないことに加え元々の顔や表情を知らないことが影響し自己評価が低くなっているのか、もしくは入学前からスキルが低いのかは今回の調査では検証が難しい。

表9 「表情」に関する意思伝達・他者理解スキルの低い生徒の学年別人数

	⑧ ⑩ 1-1	⑧ ⑩ 1-2	⑧ ⑩ 2-1	合計
1年	11	2	3	16
2年	5	5	2	12
3年	3	1	1	4

続いて、相手の気持ちを推測する「他者理解スキル」⑩相手が何を考えているかわかる、について自己評価が低い(評価が「1」)生徒の学年別人数と自由記述の内容を表10に示す。

学年別人数で最も多かったのは1年生だった。そのうちコミュニケーションについての不安を記述していたのは6名、予防行動についての不安を記述していたのは5名だった。2年生も全体の人数は少ないが、コミュニケーションについての不安を記述したのは6名と半数近かった。

表 10 「相手の気持ちの推測」に関する他者理解スキルの低い生徒の学年別人数と記述内容

	人数	不安・困難度についての記述		
		コミュニケーション	予防行動	その他
1年	21	6	5	0
2年	14	6	0	0
3年	12	2	3	0

さらに、コミュニケーションスキルが全般的に低い生徒について見ていきたい。①～⑧の「意思伝達スキル」については「1」が4つ以上、⑨～⑫の「他者理解スキル」については「1」が2つ以上の生徒の人数と不安・困難度の記述内容を表 11 に示す。

「意思伝達スキル」が全般的に低い生徒より「他者理解スキル」が低い生徒の方がどの学年も多いが、対人場面での不安・困難度の記述については、いずれのスキルも3年生を除いてコミュニケーションについての不安・困難度が最も多い。

表 11 意思伝達スキルと他者理解スキルの低い生徒の学年別人数と記述内容

「意思伝達スキル」で「1」が4つ以上

	人数	不安・困難度についての記述		
		コミュニケーション	予防行動	その他
1年	11	6	1	0
2年	11	5	0	0
3年	7	0	1	0

「他者理解スキル」で「1」が2つ以上

	人数	不安・困難度についての記述		
		コミュニケーション	予防行動	その他
1年	16	7	3	1
2年	18	5	1	1
3年	12	1	4	1

4. 実施後の気づき

コミュニケーション尺度の測定において、生徒が日頃学校で見せるコミュニケーション傾向と生徒自身の自己評定に乖離が見られるように感じられた。この点から、生徒自身の自己理解が深まっていない可能性が読み取れた。

東海林ら(2012)は「社会的スキル訓練の効果は、自己評定式の尺度を用いて評価されることが多い。しかし、社会的スキルを測定するための(中略)信頼性と妥当性を備えた中学生用の尺度は少ない」と述べているが、この背景には中学生の段階では客観的な自己評価が難しいため、教師などによる他者評定などの方がより信頼性が高いことが考えられる。

今後は、担任や養護教諭が行うコミュニケーションスキル尺度の測定の際、それまでの学活・保健指導・道徳の授業等の構成や展開などを工夫・検討したい。

5. おわりに

今回の調査は、コロナ禍で多くの生徒が不安を抱えている実態に寄り添うため、生徒の声を聴き取ることを目的の1つとし、実施することで生徒の心の窓口の1つとして養護教諭や保健室を活用してもらうためのきっかけ作りとなった。

調査を行う前に「先生(養護教諭)は今の皆さんの状況を〇〇と捉えていて、みんなとみんなの周りの人達の健康を守りたい。そのためにみんなの声を聞きたいと思うので、そのままの気持ちで書いてくだ

後藤美由紀・中條和光・森田愛子(2020),「感染症流行時における予防行動が中学生のコミュニケーションへ与える影響を探る」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 50 集」, 65-78.

さい」と話し, 終了後に実施した今後の行動に関する保健指導の中では「先生」ではなく「先生たちみんな」でサポートするので」と相談窓口が養護教諭だけではないこともメッセージとして伝えた。

前任の養護教諭や小学校の養護教諭による保健室経営, 学校保健への取り組みがあったからこそ, サポート窓口として保健室, 養護教諭が本校の生徒らに認識されていると感じている。

今後も生徒が教師に対してだけではなく学級・学年, その他の学校生活の中で友達に対しても適切な自己開示することができる場や手段を検討し, 感染症流行時のみならず平常時でも生徒の心のケアや生徒がよりよいコミュニケーションを身につけるための支援を行っていきたい。

【 引用・参考文献 】

広島大学附属東雲小学校・東雲中学校:「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための学びを豊かにする授業の創造—教科等本来の魅力と学びのつながりの追求—, 東雲教育研究会実施要項, 2019.

国立成育医療研究センター:「コロナ×こどもアンケート」第4回調査報告書, 2021

東海林渉ら:「中学生用コミュニケーション基礎スキル尺度の作成」『教育心理学研究第 60 巻第 2 号』137-152, 2012

小川一美:「対人コミュニケーションに関する実験的研究の動向と課題」『教育心理学年第 50 集』187-198, 2011

松尾直博, 新井邦二郎:「児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係」『教育心理学研究第 46 巻第 1 号』21-30, 1998

1. 今の自分について教えてください。

①最近, 下のようなことに自分が気をつけているか, あてはまるものに○をつけてください。

		気をつけていない	あまり気をつけていない	少し気をつけている	気をつけている
1	マスクを正しくつける				
2	こまめに手を洗う				
3	アルコールで手指を消毒する				
4	友達と距離をとる				
5	友達と大声で笑い合う				
6	友達としゃべらずにお弁当を食べる				
7	声の大きさに気をつける				

②学校での友達の行動についてどう感じているか, あてはまるものに○をつけてください。

		不安に感じる	気にならない	安心する
1	マスクをつける			
2	こまめに手を洗う			
3	アルコールで手指を消毒する			
4	自分と距離をとる			
5	自分と大声で笑い合う			
6	自分としゃべらずにお弁当を食べる			
7	声の大きさに気をつけている			

③今の自分にあてはまるものに○をつけてください。なるべく『はい』『いいえ』で答えてください。

		はい	どちらでもない	いいえ
1	私は、相手に自分の気持ちを伝えるのが得意です。			
2	私は、気持ちをすなおに人に伝えます。			
3	私は、感じていることをわかりやすく伝えます。			
4	私は、気持ちをことばで表現するのが得意です。			
5	私は、相手に伝わるように思っていることを伝えます。			
6	私は、感じていることを正直に人に伝えます。			
7	私は、相手にきちんと伝わるように、自分の感じていることを話します。			
8	私は、思っていることを表情で表現するのが得意です。			
9	私は、相手のさりげない行動から相手の伝えたいことがわかります。			
10	私は、相手が何を考えているか、わかります。			
11	私は、表情から相手の気持ちを想像するのが得意です。			
12	私は、ことばがなくても相手の伝えたいことがわかります。			

2. 友達と一緒にいる時の感じ方について, 1年前とどう変わったか, あてはまるものに

○をつけてください。

		気にならなくなつた	変わらない	気にするようになった
1	自分の表情			
2	自分の視線			
3	自分の言葉			
4	自分の声			
5	自分のしぐさ			
6	相手に気持ちを伝えられているか			
7	相手の気持ちに気づくことができるか			
8	自分が言葉を選んで話しているか			
9	友達の表情			
10	友達の視線			
11	友達の声			
12	友達のしぐさ			
13	自分と友達との距離			

3. 今年になって, 休校中も含め, 友達と関わる時に感じる, 困ったことや気になることを書いてください。